

## 府主教フィリップ伝(上)<sup>(1)</sup>―翻訳と注釈

三浦清美

### 〈解説〉

イワン雷帝ほど奇妙で謎めいた歴史上の人物は、ロシア史でも稀であろう。暴虐の限りを尽くしたにもかかわらず、意外にロシア人から憎まれておらず、畏れられるというよりむしろ、憧憬の念をもって崇められている。ピヨートルがロシア社会に先鋭的な変革を強いたがゆえに、同時代人からアンチ・キリストとして憎まれたのと対照的に、あれだけのテロを行ったイワン雷帝を、アンチ・キリストと位置づける評者は一人もいない。

「地上の神（アウトクラトール／サモジエルジェツ）」になり切ろうとしたところに、イワン雷帝の狂気があったことは疑いないが、その狂気とその根源にある激しい気質に、ある程度向かい合うことができた同時代人が何人かいた。その筆頭はやはり、イワン雷帝がこの世で唯一心を許した最初の皇妃、アナスタシア・ロマノヴナ・ザハリナである。そのほか、身分を超えた男女の愛こそが、共同体の安寧の基礎にあるという思想を、自らの作品『ムーロムのピヨートルとフェヴロニアの聖者伝』のなかで歌い上げたエルモライ・エラズム、狂気への埋没によって身を守りながら、イワン雷帝に鋭い論難を突きつけた佯狂者ワシリイ<sup>(2)</sup>も、そうした人間の一人としてその名を挙げることができる。しかしながら、剛直な正義感に貫かれ、イワン雷帝の暴虐に正面から渡りあった勇敢な府主教フィリップほど、同時代の人間に強い印象をあたえた人物は存在しない。

ここで翻訳の原典とした中世ロシア語テクストを校訂した、I. A. ロバコヴァは次のように述べている。「フィリップにおいておそらくはそれ以上に特筆すべき役割は、道徳的な諸原則の確立であった。これらの道徳的な諸原則に違反することは、どんな状況に強いられても、死の恐怖に襲われていても、政治的な合目的性があったとしても許されないのである。たしかに、イワン雷帝の治世は、ロシア史上でもっとも血生臭く残酷で非道徳的な時代だったには違いないが、この人生に意味と美と道徳的諸原則の搖るぎなさをもたらした人々も確かに存在していたのである。」

絶望の時代のなかの一筋の明かりのような、この府主教フィリップという人物については、しかしながら、日本の研究者にはあまりよく知られていない。積極的に紹介されてきたとも言えない。もっとも信頼できるロバコヴァの校訂テクストに拠って『府主教フィリップ伝』を翻訳、紹

介する意義はここにある。

フィリップの名は多くの史料（ノヴゴロド諸年代記、ソロフキ年代記、そのほかの文書）、アンドレイ・クルプスキイから外国人オプリチニキのタウベ、クルーゼ、シュターデンにいたる、実にさまざまな方向性をもった文学、社会評論の作家たちの著作で言及されているが、信頼に値する正確な情報は多くない。

フィリップ（世俗名ヨードル・ステパノヴィチ・コルイチエフ）は、世襲貴族に属していた。彼の血統は、アンドレイ・コルイチエフに遡る名家で、この家系からロマノフ家、シェレメチエフ家、エパンチン家、ボブルイキン家、スホヴォ・コブイリン家、ネプリュエフ家、コノヴニツイイン家が出た。フィリップは1507年2月11日に生まれ、1537年にモスクワを去り、1539年に剃髪を受け、1545年にソロフキ修道院の院長となり、1566年7月20日、「オプリチニナとツアーリの家庭には介入しない」という条件のもとで、モスクワならびに全ルーシ府主教となった。ツアーリの際限のない残酷を見て見ぬ振りをすることができず、それと2年間にわたり戦ったのち、1568年11月4日、ツアーリの懺悔聴聞僧の中傷と、大部にわたる論難演説の末、府主教の座を追われ、トヴェーリのオトローク修道院に流刑され、1569年12月23日、その地でマリュータ・スクラートフによって絞殺された。1591年に彼の遺骸がソロフキ修道院に運ばれたことが知られている。ソロフキ修道院では、その死のときから聖人として崇敬されていた。

フィリップにかんする情報がある、基本史料として用いられてきた『フィリップ伝』は、かなりの数（その数およそ170）の写本で現代に伝えられている。しかしながら、これらすべての写本は、トゥルポフ版、コルイチエフ版、短縮版の3つの編纂本に遡るものである。

教会史にかかわる歴史研究、著作において、フィリップにかんする物語は、150以上の写本が依拠するトゥルポフ編纂本から採られている。拡大版のもう一つの編纂本であるコルイチエフ編纂本は、ラトウイシェヴァの特別な研究の対象となった。この研究者は、たった一つの写本によって伝えられたこの編纂本が、フィリップの独白によっていま拡大されていない原テクストを保存しているという結論に達した。トゥルポフ版で付け加えられた独白の元となったのは、6世紀ビザンツの著作家アガペトスの作品である。

これにたいし、短縮版について最初に言及したのは、ヤホントフである。拡大版においては、装飾過多な入り組んだ文体への志向が強く、ベロオゼロのキリル、スヴィリのアレクサンドル、オシェヴニヤのアレクサンドルらの聖者伝の影響が看取されると指摘しながら、この研究者は短い編纂本が存在するという指摘を行った。ヤホントフは、短縮版の編纂者が、嵩増しされた複雑な序文だけではなく、その伝記からあらゆる典型的な場面、さまざまな増幅、修辞的形象を排除して、純粹に歴史的証言だけを残そうとした可能性があることを強調している。

短縮版が拡大版を切り詰めたものであることを証明した者はいないにもかかわらず、短縮版が拡大版の縮約であることは自明のことと見なされ、『フィリップ伝』が研究される際には、この

縮小版編纂本が考慮されることとはなかった。しかしながら、この翻訳の原典となった、短縮版によるテクストを校訂したロバコヴァは、テクスト学的分析を進めると、短縮編纂本、トゥルポフ編纂本、コルイチエフ編纂本は、一つの共通の起源をもち、原テクストにもっとも近い、この共通の起源となるテクストは、短縮版編纂本によって伝えられるものであり、これが拡大版の編纂者によって付加されたと結論づけている。

『フィリップ伝』の短縮版は、文学的トポス、複雑さ、修辞的なわざとらしさが欠如しているだけではない。短縮版においては、拡大版と異なり、大部分の罪がイワン雷帝からその周囲の人物たちに転嫁される傾向が存在しない。短縮版においては、イワン雷帝こそが執行される悪の主要なる力そのものであり、マリュータもグリヤズノイもバスマノフもピミニも、彼の意志の従順なる執行者にすぎない。

まさにイワン雷帝に道徳的に異を唱えるのがフィリップであり、しかもそれは悪意も憎しみも介在することではなく、自らの魂における善のためにイワン雷帝その人と闘うのである。オプリチニキを論難するフィリップは、流血と憎悪と無法に抵抗する常かわらぬ反対者として描かれる。聖者伝文学に伝統的な、迫害者であるツアーリと聖者の葛藤は、『フィリップ伝』においては、政治モラルの領域で行われている。まさに道徳的原理が欠如しているという点こそが、『フィリップ伝』の作者の描写におけるイワン雷帝を、迫害者ツアーリにしているのである。すなわち、ここにはゼムシチナとオプリチニナに「分割された帝国」、すなわち、「ロシア」の人々の受難と死が描かれているのである。

この翻訳は、ロバコヴァによる校訂テクストに拠っている。この解説もその多くを、校訂テクストに付されたロバコヴァの解説に負っている。<sup>(3)</sup>ロバコヴァは、17世紀第3四半世紀の写本 РНБ, Соловецкое собр. №191/191, л. 1-23 об.に基づいてテクストの校訂を行っている。なお、翻訳テクストは本稿では完結せず、続稿を予定している。

### 〈翻訳〉

モスクワ府主教フィリップの聖者伝

大公ワシリイ・イワノヴィチ<sup>(4)</sup>の御代に、ツアーリの君臨するモスクワに、ステファン・コルイチエフ<sup>(5)</sup>というある貴顕がいた。このステファンに敬虔なる男子が生まれ、フェオドルと名付けられた。<sup>(6)</sup>この男の子がある年齢に達すると、読み書きを習いに出された。

ある時間が過ぎて大公ワシリイ・イワノヴィチが修道士ワルラームとなって死んだ。<sup>(7)</sup>そのあと、彼の息子イワン・ワシリエヴィチが父の財産と帝国の錫杖を継承した。少年フェオドルはこのイワン・ワシリエヴィチに愛された。

少年フェオドルは北方の海に囲まれた島にあるソロフキ修道院、<sup>(8)</sup>神に似たる父たち、ゾシマとサヴァーチイの修道院について聞き、ツアーリの君臨する町、モスクワを出立し、<sup>(9)</sup>ヴェリー

キイ・ノヴゴロドに到着し、さらにオネガ湖にいたり、キジーという名のある村<sup>(10)</sup>にたどり着いた。<sup>(11)</sup>この村の住人のある人のところに居着き、着の身着のままの粗末な衣服以外、何ももつていなかったので、羊の放牧を手伝いはじめた。

その後、ソロフキ修道院にたどり着いた。一年半のあいだ働きながらそこで過ごした。薪を割り、地面を耕し、石を運び、修道院のあらゆる労働に従事した。その後、剃髪を受けて修道士となり、フェオドルの代わりにフィリップと呼ばれるようになった。9年間、修道士としての功業のなかで過ごした。

当時この修道院の修道院長はアレクシイ<sup>(12)</sup>すでに年老いていたが、このフィリップに自らの権力のすべてを譲った。また同様に、すべての兄弟たちがフィリップを愛し、彼を修道院長に選んだ。人々は彼とともにヴェリーキイ・ノヴゴロド大主教フェオドーシイのもとに向かった。そして、この地でフィリップは大主教フェオドーシイ<sup>(13)</sup>によって修道院長に叙聖され、修道院にもどった。

聖フィリップは修道院のことを気遣った。兄弟修道士たちと相談し、至聖なる神の御母の敬虔なる就寝に捧げる教会<sup>(14)</sup>を建立し、そのなかに洗礼者ヨハネのための玉座を造り、奥行き12サージェニの卓を据えた。<sup>(15)</sup>

大きな丘を切り崩し、谷を開墾し、湖から湖に水路を整備し、修道院の壁のなかにひきいれた。<sup>(16)</sup>修道士たちが心安らかに暮らせるように水路と水車を造り、設備の行き届いた住まいを建てた。

聖なる師父たち、ゾシマとサヴァーチイの加護を呼びかけながら、神に似たるこの人がまばゆい光が輝くのをご覧になったその場所に、<sup>(17)</sup>我らが主、イエス・キリストの偉大なる変容に捧げられた、レンガ作りの教会<sup>(18)</sup>を建立することを発心した。発心したとおりに行動に移した。神に似たる師父たち、ゾシマとサヴァーチイと主戦士ミカエルの教会を一つにし、別の側で4つのそのほかの教会を高台に建立した。12使徒教会、<sup>(19)</sup>70人使徒教会、<sup>(20)</sup>階梯者聖ヨハンネスの教会、<sup>(21)</sup>偉大なる聖殉教者、戦士テオドロスの教会を建立したのである。そして、フィリップは聖なるイコン、聖別された器、書物、あらゆる教会の飾りで諸教会を飾った。<sup>(22)</sup>同じ教会の北側壁に、自らの柩を安置する場所をも掘った。彼の遺骸が追放から解放されてもって来られたときに、遺骸はそこに安置された。

ツアーリが君臨するモスクワの町で、府主教マカーリイ<sup>(23)</sup>が主のもとに旅立ったとき、マカーリイの祝福によってアファナーシイ<sup>(24)</sup>という人物が、ツアーリが君臨するモスクワの都の偉大なる府主教の玉座に登極した。このアファナーシイは一年だけ府主教位にあったのち、自ら府主教位を辞した。

全ルーシのツアーリ、イワン・ワシリエヴィチは、フィリップの暮らしぶりを耳にして、ソロフキ島の聖なるフィリップ院長のもとに書簡を認め、一刻も早くツアーリの君臨する町、モス

クワに魂の仕事をするために来るよう命じた。かのフィリップは書簡を受け取ると、兄弟たちに読んで聞かせたが、兄弟たちはひどく悲しんだ。

聖なる人はまもなく旅路についた。彼は出立すると、ヴェリーキイ・ノヴゴロドから3ポプリシェのところに達した。ヴェリーキイ・ノヴゴロドの人々は、聖なるフィリップの到着を聞くと、彼を出迎えに城外に出て、聖なる人を敬意をもって出迎え、ツアーリのまえで自分たちのことを取りなして自分たちを守ってほしい、というのも、ツアーリはこの町にたいしてご立腹であるという噂が流れてきているからである、と懇願した。

ほどなく聖なる人は、ツアーリの君臨する町に赴いた。そして、彼がツアーリの君臨するモスクワの町に到着すると、ツアーリはこの聖なる人を丁重に出迎えるように命じた。聖なる人はツアーリの食卓についたが、ツアーリは大いなる贈り物をして聖なる人を敬った。そのあと、ツアーリは聖なるフィリップにたいして聖なる書物からの引用を交えながら、このように言った。「ルーシ府主教の教会は、寡(やもめ)の状態にある。教え導く者が見つかっていない。いまこそ、我らと全宗務会議の助言にしたがって、そなたを通して恩寵が示されんことを。」聖なる人はこれを聞き、自らの目にいっぱい涙をためてこう言った。「この務めは私の力を超えております。おお、尊いツアーリ陛下、主のために私をお放ちください。」ツアーリとすべての大貴族たちは、この偉大なる務めについてくれるように聖なる人を強要してかれの躊躇いを葬り去った。

そして、ツアーリは町々に書簡を送達して、大主教、主教がツアーリの君臨する町、モスクワに集まり、この聖なる人を府主教にするよう決定することを命じた。

聖なる人は、聖なる書物によってツアーリとツアーリの子供たちを教え導きながら、府主教館に戻った。このときから、ツアーリは聖なる府主教フィリップのことをことのほか愛した。また同様に府主教フィリップもツアーリの健康を深く慮った。荒野での生活を思い出し、神に似たる師父、ソロフキの奇跡成就者、ゾシマとサヴァーチイが自分を助けてくれるように呼び招きながら、府主教の公邸にゾシマとサヴァーチイの名において聖堂を建立し、あらゆる美でその聖堂を飾った。フィリップは毎日毎日この聖堂にやって来ては、救済を祈禱し、物憂さと悲しみを打ち払った。

しばらく経つと、悪魔は貴顕たちに敵意という雑草を仕込んだ。彼らは悪しきもの思いを抱き、お互いを憎み合って、蛇のようにシューシュー音を立ててツアーリを激しい怒りへと驅り立てた。この邪な讒言によって、ツアーリは自らの誠実な僕や名のある親戚、友人たちを恐れ、自らの大貴族たちにたいし鎮めがたい憤怒を抱いた。

このゆえにツアーリにして全ルーシ大公イワン・ワシリエヴィチは自らの謀を行動に移し、全ルーシ宗務会議をモスクワに召集した。ノヴゴロド大主教ピーメン、<sup>(25)</sup>カザンのゲルマン、<sup>(26)</sup>スーズダリのパフヌーチイ、<sup>(27)</sup>リヤザンのフィロフェイ、<sup>(28)</sup>スマレンスクのフェオフィル、<sup>(29)</sup>トヴェーリのバルソノフィイ、<sup>(30)</sup>ヴォログダのマカーリイ、<sup>(31)</sup>そのほかの聖職者たちが集まった。

そして、自らのツアーリとしての企てを知らせた。自らの帝国を二つに分け、ツアーリの宮廷を別に創設するというのである。

福なるフィリップはそのとき主教たちと立場を共有した。彼らはみなそのような企てには絶対反対であると、意見の一致を見ていたのである。<sup>(32)</sup>

ところが、ある主教が、みんなで合意した話について、ツアーリに密告した。すると、ほかの者たちは自分たちの企てを放棄し、そのなかのある者たちは福なるフィリップを告発した。ツアーリが自分の考えに固執するときには、恐怖のためにみなその者たちはツアーリに反駁することができなかつたのである。聖なる府主教フィリップは、そのような企てはやめてほしいと、ツアーリに懇願し、聖なる書物から引用して言葉を尽くしてツアーリを説得し、そのあとにこう言った。「そのようなことをしようとしても、私たちの祝福を受けることはできませんし、これからもそのようなことはないでしょう。」

そのあと、フィリップはこう言いはじめた。「聖なる聖職者のみなさん。師父よ、兄弟たちよ、何のためにあなたたちは集まっているのですか。あなたたちは何を恐れているのです？ほんとうのことを申し上げましょう。あなたたちが沈黙していれば、ツアーリの魂は罪に墮ち、自らの魂にはつらい破滅が、正教信仰には悲しみが訪れるでしょう。どうしてあなたたちは朽ち果てる名誉を求めるのですか？どんな位にいようと、私たちを永遠の苦患から遠ざけてくれるものはありません。ツアーリの聖職者会議が、生活の糧を得るために自分たちのなすべきことをせず、朽ち果てるこの世の名誉のためにあくせく働いておられる。」

彼らは謙抑な見せかけのなかで立っていたが、ほんとうのところは、裏切り者たちであり、悪の帮助者であった。ツアーリのご機嫌をとり結ぼうとしたのは、ノヴゴロドのピーメン、スーズダリのパフヌーチイ、リヤザンのフィロフェイ、受胎告知教会の長司祭エフスターイ<sup>(33)</sup>であった。エフスターイにいたっては、魂の問題で聖なるフィリップからお咎めを受けていた。というのも、彼はツアーリの懺悔聴聞僧で、絶えまなく密かにかつ露骨に聖なるフィリップについて、あることないことを讒言していたからである。そのほかの者たちは、フィリップの側にもツアーリの側にもつかなかつたが、ツアーリの望むように振舞っていた。しかし、一人カザン大主教ゲルマンだけが福なるフィリップに味方した。

ツアーリのお気に入りに者たちは、聖なる者について嘘話を捏造してこう言った。「すべての点でツアーリの言うことを聞き、あらゆることで偏見なくツアーリに祝福をあたえ、ツアーリのご意志を実行に移してツアーリを憤怒させなかつたなら、どんなによかったことか。」この連中がツアーリを怒りに駆り立て國を割ろうとしている状況のなかで、ツアーリの怒りを慈愛に変えるなどということがどこでできるというのか。ツアーリは、誰も自分に反対して意見を述べる者がおらず、たった一人フィリップだけが、敬虔さを慮ること、帝国を割ってはならないことについて反対意見を言うことを見て、ツアーリの怒りは聖なる府主教フィリップに向かった。

ツアーリは自らの意志と、讒言者たちの助言で、自らの意図するところを実行に移した。自分、すなわち、君主に好意的な公、大貴族、そのほかの貴顕をオブリチニク、すなわち、宮廷人と名づけ、ほかの公、大貴族、残りの貴顕をゼムスキイと名づけた。かくのごとくしてツアーリは自らの国を割ったのである。

しばらく時間が経つと、ツアーリはこの謀のために、アレクサンドロフ村<sup>(34)</sup>の、愛する自らの家にいた。私には、涙がこみ上げる。村はそのような名前で呼ばれたのだ。この村で行われた謀によってエジプトの捕囚よりもひどいことが起こったのである。彼らは、突如としてツアーリの君臨する町全体が包囲されるのを見た。それは聞くだに恐ろしいことであった。そのとき、ツアーリにして大公、イワン・ワシリエヴィチは、すべてのその軍勢とともに武具を固めて、抜き身の剣を携え、顔つきも気質も行いもまったく揆を一にして「罪がはじまり、無法を生んだ」のである。彼らは同じ黒い服をまとっていた。このほかのことは、書くのも恥ずかしい。

ツアーリはいと清らかなる神の御母の聖堂教会<sup>(35)</sup>に入った。聖なるフィリップはこれを見ると、まったくこれほどの凶暴な行為に怯えることなく、正教のなかで大いなる騒乱、耐えがたい巨大な恥知らずな悲しみ、傷害が起こっているのを目撃した。フィリップは魂において輝き、心を堅固にしてツアーリに聖なる書物から引用して多くのことを話した。ツアーリは長い間このことに耳を傾けていたが、この聖職者の論難に耐えることができず、憤怒に満たされてこう言った。

「どうしてそなた、黒衣の僧よ、そなたはツアーリの行いに容喙しようというのか。私の近親者が私を亡き者にしようとしているのを、そなたは知らないのか。」聖なる人は答えた。「聖靈から与えられた恩寵によって、聖なる宗務會議の選びとそなたたちのご命令によって、私はキリスト教会の牧者なのです。敬虔さのために役立つことをしなければならないということにおいて、私はそなたとまったく同じなのです。」「聖なる敬虔なる父よ、私はそなたにたったひとつのことと申しわたす。『黙れ』ということだ。私たちの命令どおりに私たちを祝福するがよい。」聖なる人は言った。「私たちの沈黙は、そなたの魂に罪を重ねさせ、死をもたらします。なぜなら、船乗りが間違ったとしてもわずかな損害を被るにすぎませんが、舵取りが間違えを犯せば、船全体が破滅します。」<sup>(36)</sup>このほか、たくさんの言葉を聖なる書物から引用して言った。ツアーリは言った。「聖なるご主人よ、私の股肱の臣が私にたいして立ち上がり、私に悪をなそうと画策しているのだ。」<sup>(37)</sup>聖なる人は、聖なる書物から引用しながら、多くのためになることを言った。「敬虔なるツアーリよ、そなたは嘘偽りを言う者を罰し、腐りきった肢体を切り離すように、そのような者は自らから遠ざけなければなりません。」ツアーリは言った。「私の帝国に逆らうのはやめよ。私の怒りがそなたに下らぬように。」聖なる人は言った。「敬虔なるツアーリよ、府主教という権力を受けるために、そなたに懇願することもありませんでした。誰かに周旋してもらうこともありませんでした。そなたの手に贈り物を握らせることもありませんでした。なぜ私から荒野の生活を奪ったのですか。あえて錠に反することをするなら、お望みどおりなさるがよい。功業の機

会が巡ってきたときに、気弱になってはいけない。」ツアーリはたちまち沈思黙考に耽りながら自らの部屋に退いたが、聖なる府主教フィリップにたいして心底憤っていた。<sup>(38)</sup>このような企てを嗾（け）しかけ、悪を嗾（そそのか）す者であるマリュータ・スクラートフ、<sup>(39)</sup>ワシーリイ・グリヤズノイ<sup>(40)</sup>は、同じく企みを企てようとする者たちとともに、この聖なる人にたいしてたえまなくあらゆる讒言をおこない、ツアーリがかかる企てを止めるように彼らを教え諭すがないように画策した。<sup>(41)</sup>とはいえ、その彼らのちにはもっと苦しむようになるのである。<sup>(42)</sup>

しかしながら、このあと、正教信仰にある人々を多くの悪が襲った。オブリチニナのために全世界で大いなる騒乱、流血が起こり、裁判は公平さを欠き、降りかかる災厄のためにお互いのことが理解できなくなった。

庇護を求めてこの牧者のところにやってくる者たちもいた。彼らは大きな声で泣き叫び、死が目前に迫っているのを見て言葉を発することなく、体に残った拷問の傷跡を見せるだけであった。聖なる者は、神の書物から言葉を引いて彼らを慰めた。彼らは言葉という食べ物をもらって、めいめいの家に戻っていった。

しばらくの時が過ぎた。日曜日に聖なるフィリップは神の聖体礼儀を行っていたが、ツアーリは、聖堂で祈祷の歌が朗誦されているあいだに、黒い衣装に身を包んであらわれた。ほかの悪の帮助者たちも、同じく黒い衣装をまとい、自らの頭には丈の高い帽子をかぶり、「カルデア人」がしているのと同じ服装をしていた。<sup>(43)</sup>大貴族たちとすべての高位の教会人たちは、同じような衣装をまとい、同じ姿かたちをしていた。聖なるフィリップは、教会儀礼の式次第を、定められた順序にしたがっておこなっていたが、ツアーリの到来を喜び、神々しい光に満ち溢れていた。フィリップは予め決められた場所に立ち、ツアーリはその場所に3回足を運び、祝福を求めたが、この聖職者はツアーリにたいしてなんの返礼もしなかった。大貴族たちはこう言った。「聖なる府主教猊下、ツアーリ、イワン・ワシーリエヴィチは畏くも聖なる猊下のまえに進み出て、猊下から祝福をいただくように求められておられます。」聖なる人はツアーリを一瞥してから前に進み出てこう言った。「敬虔なるツアーリよ、そなたは誰に扮しておられるのか。陛下はそのような格好をなさることで、自らのご存在の畏さを台無しになさっておられる。なぜなら、御身は御身にふさわしくない姿形に扮しておられるからです。太陽がこの大空に輝くようになって以来、敬虔なるツアーリが自らの帝国をかくのごとき争乱に巻き込むなど、いまだかつて聞いたことがありません。」そのあと、フィリップはこう言った。「おお、ツアーリよ。私達が主に捧げ物をしておりますのに、至聖所のそとでは罪のないキリスト教徒たちの血が流れております。人々はなんの咎もないのに死んでいっているのです。」ツアーリは憤怒に燃えてこう言った。「おお、フィリップよ、そなたは我らの意志を枉げようというのか。」聖なる人は、聖なる書物の言葉を矢のように浴びせかけた。ツアーリは、聖職者の命令と教えをまったく顧慮しようとせず、フィリップにたいして怒り狂い、腕を振り回して脅しつけ、府主教の位を奪うぞと迫ったり、ありとあら

ゆる拷問のすえに殺すぞと脅かしたりした。そして、ツアーリはこう言った。「おお、フィリップよ、我らの権力に逆らおうというのか。」忍耐強い殉教者にして魂の牧者であるフィリップは、懲罰や拷問の脅しに怯むことなく、主によって自らに託された聖なる言葉の羊の群れに、自らの魂を働かせ、こう言った。「敬虔なるツアーリよ、そなたのご命令に私達は従いませんし、そなたが悪意をもって画策なさっている謀にも同意もしません。たとえそなたから、何万回も酷い責め苦を受けようとも。」そしてふたたび、聖なる書物からの引用を繰り返した。

ツアーリはこれを聞くと憤怒に満ち溢れた。悪魔に教唆されて理性を失った煽動者たちは、敬虔さと世界の平和を喜ばず、正教キリスト教を害し、敬虔さを破壊しようと躍起になって、正教のツアーリを大いなる憤怒に駆り立てようとした。彼らは、虚しく過ぎ去る自らの名誉と尊敬のために、正しからざる企てを思いついては、ツアーリを嚇怒と大いなる憤怒に追いやった。嘘偽りの言葉を紡ぎ、嘘の証言者を唆して聖なるフィリップに罪を擦りつけ、彼のことを一般民衆のまえで貶めて、彼から民衆が離反するように、最終的には、府主教位を取り上げるように画策した。

ツアーリと主教たちがまだ教会にいたとき、フィリップの敵たちに教唆された、ある教会の朗唱者がフィリップのことを讒言する汚らわしい言葉をが鳴りはじめた。これを聞いた主教たち、ノヴゴロド主教ピーメンとそのほかの者たちは、ツアーリのご機嫌をとろうと、聖なる人に怒りをぶちまけ、このように言った。「ツアーリにお説教を垂れるくせに、自分は破廉恥なことをしている」と。聖なるフィリップは大主教ピーメンに言った。「人間に気に入られるようにあくせく努力し、他人の玉座を掠め取ろうとしても、自分の位から容赦なく追い立てられることになるだろう。」(聖なるフィリップが府主教位から追わされてから間もなく、大主教ピーメンは自らの玉座から追われ、追放のなかで逝去した。)

聖なる府主教フィリップを愛する主教たちは、それが嘘であることを知っていたが、あえて口に出す勇気がなく、彼の失脚に向かって事が進んでいくのをなすすべもなく見ていた。父は若者にたいして父の愛を注ぐものだ。というのも、若気の過ちは最も軽い罪であることを知っているからである。フィリップはこの朗唱者に向かって次のように言った。「愛する者よ、キリストがおまえに慈悲深くあってくださいますように。おまえにこれをせよと教唆した者たちを赦したまえ。というのは、おまえがこのようなことをして褒美をもらったことが、私にはわかっているからだ。私の愛しい者たちよ、おまえたちは、何故に彼らが私を追い落とすことを望むのか、何故に彼らがツアーリを嚇けてこのようなことをさせるのかがわかっているか。というのは、私は彼らに嬉しがらせの言葉を言ったりはせず、絹の着物を着たりもせず、彼らの安逸に赦しをあたえたりしなかったからだ。眞実にたいして沈黙したまま主教位にとどまることは、私には耐えられない。」

正教の民は敬虔さのために骨身を惜しまず、一步も引きさがろうとせず、ますます聖なる府主

教フィリップに惹きつけられていった。ツアーリは聖なるフィリップにたいして憤りを募らせて言った。ツアーリとフィリップはどこで出会おうと、穩便に済まされることはなかった。善良なる殉教者はツアーリを恐れることもなかったし、沈黙を守ることもなかった。

暫しの時が過ぎた。プロホル、ニカノル、そのほかの使徒たちの祝日<sup>(44)</sup>がやってきた。聖処女の修道院が町の外にあり、そのなかに彼ら使徒に捧げられた聖堂<sup>(45)</sup>があった。この祝日に、代々ツアーリのしきたりにしたがって、ツアーリと府主教がここに会する習わしがあった。ツアーリはそのすべての大貴族たちとともに、府主教はそのすべての随員たちとともに、修道院の外で聖なる十字架を携え、その外壁の周りを回り、聖なる門までやってきた。やがて時が来て聖なる福音書を読む段になったところ、聖なるフィリップが後ろを振り返ってみると、タフィヤ<sup>(46)</sup>を被ったツアーリの随員が目に留まった。

フィリップはツアーリのほうに向きなおり、ツアーリに言った。「国を統べるツアーリよ。敬虔なるツアーリがハガル<sup>(47)</sup>の掟を固守するのはいかがなものか。」ツアーリは答えた。「それはどういうことか。」聖なる人は言った。「そなたとともに来た軍団のなかに、サタンの軍勢に属するような者がいる。」

ツアーリは何が起こったのかを確かめようと、あたりを見回した。罪のある者は頭から帽子を隠した。ツアーリはもっと熱心に、誰がそんなことをしたのかを確かめるために、尋問をはじめた。ツアーリの周囲の者で、ツアーリにこのことを告げができる者はいなかった。というのは、下手人はツアーリの寵臣だったからである。悪を帮助し、嘘偽りを並べ立てる者たちは、罪を聖なるフィリップに擦りつけた。「こんなことを言い出すのは、ツアーリの権威に泥を塗ろうとしているからです」と。

ツアーリは憤りと憤怒で爆発し、聖なる人を芳しからざる言葉で罵りはじめた。というのも、あらゆる点において、フィリップがツアーリに刃向かったからである。

このあと、ツアーリはどうやって聖なる府主教フィリップを府主教位から追い落としてやろうかと、思案をはじめた。何の理由もなしにフィリップを追い落とすことは避けたかった。なぜなら、民衆が叛乱を起こすからである。ツアーリは嘘の証言をさせたあと、聖なるフィリップの過去の生活がどのようなものだったかを調査する使節をソロフキに派遣した。派遣されたのは、スーズダリ主教パフヌーチイ、典院フェオドーシイ、<sup>(48)</sup>ワシーリイ・チョムキン公、<sup>(49)</sup>さらに彼らとともに自らの軍勢に属する多くの人々である。不正なことを行うこれらの人々がソロフキ修道院に到着すると、ある修道士たちはお追従と賄賂で懐柔し、別の修道士たちは高い位を与えると釣り、彼らの望むような証言を引き出しあはじめた。懲罰の恐怖で脅す場合もあった。彼らは、軽率な輩、いやあえて私は言うが、考える力のまったくない者たちを自分たちの企みの中に引きずりこんだ。

ワシーリイ・チョムキン公と典院フェオドーシイは苦もなく聖なる人の罪状を集め遂せ、主教

パフヌーチイはこの聖なる人について真実を物語る人たちの話を聞こうとはしなかった。修道院長パイーシイ<sup>(50)</sup>には主教の位を提供することを約束し、自分たちの謀に引き入れた。

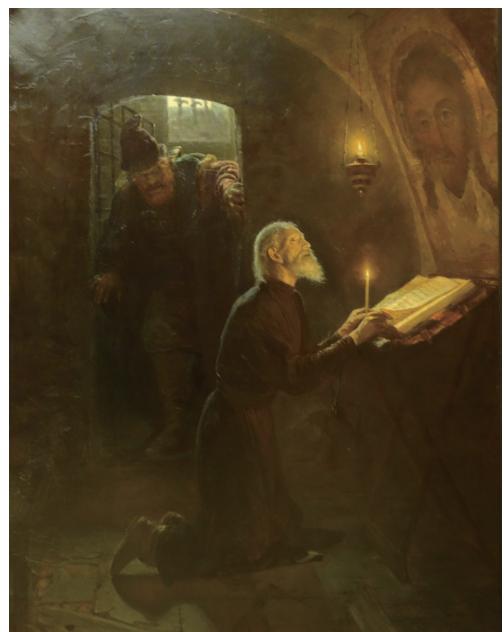
かくのごとくして悪臭ぶんぶんたる証言を集めると、不正なる作り話をでっち上げ、蛇のように自らの舌を尖らせた。彼らは、この修道院に暮らす、神を宿したる聖なる修道士たちに、多くの傷をもたらした。この聖なる人にたいしてとんでもない嘘を並べ立てるなどという虚しい行いをしたからである。敬虔な生活のお手本である、そうした修道士たちは、自らの牧者のために多くの悲しみを喜んでわが身に引き受け、声を一にして真実を叫んでいた。それはすなわち、神に倣った、敬虔なる咎のない暮らしであり、この聖なる場所とそこで暮らす兄弟たちへのさまざまな貢献である。

しかしながら、ツアーリに派遣された者たちは、聖なる人の芳しい行いについては耳を貸さずとせず、思慮軽率なる、というよりも、思慮のまったくない修道院長パイーシイ、彼のそのほかの隨員、嘘つきたちを引き連れて、ツアーリの君臨する町にもどった。

彼らはツアーリの御前で嘘の証言者を立て、嘘偽りの騒乱の火種となる文書を提出した。いうのも、罪への愛のために盲目となり、「堀を穿ち、掘る者は、自分が造った穴に落ちる」<sup>(51)</sup>と言った預言者を思い出さなかったからである。

ツアーリは聖なる人を難じる嘘の書類のことを耳にすると、ツアーリにとってフィリップを咎める材料が手詰まりだったので、この書類を自らと大貴族たちのまえで朗読するように命じた。するとただちに自分の怒りのはけ口を見つけるとして、「ツアーリは聖職者の罪を難じてはならない。それは主教たちが規則にしたがって裁く」<sup>(52)</sup>という神の審判を恐れなかった。ツアーリは聖なる人にたいして自らの権力を行使し、それを見せびらかそうとした。ここにいたってツアーリは手前勝手なことをおこない、一刻の猶予もあたえず、フィリップに中傷者に反論する機会をあたえなかった。

ツアーリは、聖なる人を呼びに自らの大貴族、バスマノフの子、アレクサンドル・ダニーロヴィチ<sup>(53)</sup>を多くの軍勢をつけて派遣し（彼らも犯人であれば、この男も犯人である）、聖なるフィリップを教会から叩きだすように命じた。この大貴族はいと清らかなる神の御母の教会に到着すると、牧者にツアーリの言葉を伝え、こ



A. H. ノヴスコリツェフ  
「府主教フィリップの最期」(ロシア美術館蔵)

れに次のように付け加えた。「フィリップよ、そなたは聖職者の位に相応しくない。」そして、フィリップとすべての民衆のまえで、嘘で塗り固められた文書と論難の言葉を読み上げるように命じた。

バスマノフとともに来た者たちが、猛犬のように聖なる人に襲いかかり、彼から府主教位の徵をむしり取った。フィリップは自らの合唱隊員にむかって預言者のようにこう述べた。「おお、子らよ。もうじきあなた方との別離の時が来る。だが、私は教会のために苦しみを受けることを喜んでいる。なぜなら、教会が寡婦となる時が来るからである。牧者たちが雇い人のように放逐されるであろう。誰も、神の御母の聖なる教会を終（つい）の搖るぎない棲家とすることがかなわなくなるだろう。誰もこの場に埋葬されなくなるであろう。」聖なる人が予言したとおりのことが起こった。<sup>(54)</sup>

聖なる人に、何度も継ぎを当ててぼろぼろになった修道士の服を着せて、ろくでなしを追い払うように教会から追い出し、この人を猛烈な悪臭を放つガタガタの荷車に乗せて町の外に運び出して辱めた。この人を枝で突くものもいたし、箒で殴る者もいた。ありとあらゆる罵詈雑言がこの人に雨あられと降りかかった。およそ悪魔の遊興で、無法者たちがこの聖なる人に仕掛けなかつたものはなかつた。聖なる人の府主教の桂冠にたいして、可能な限りのありとあらゆる責め苦、侮辱がなされたが、この光景は深い感動に満たされたのである。

（つづく）

### 注

- (1) この翻訳は、「中世ロシア文学図書館」シリーズ第17集として刊行されるものである。
- (2) 宮崎康子「ユロージヴィ聖者伝のモチーフの変遷についての一考察—受苦から批判へ」『ロシア文化研究』27号（2020年公刊予定、査読済み）。
- (3) Житие митрополита Филиппа (Подготовка текста, перевод и комментарии И.А. Лобаковой) // Библиотека литературы Древней Руси. Т. 13, СПб., 2000. С. 18-741, 846-852.
- (4) ワシリイ3世（1479—1533）のこと。1505年から大公。イワン3世ワシリイエヴィチのソフィア・パレオロガとの二度目の結婚で生まれた長男。モスクワを中心とした国土統一事業を過酷な手段を用いて遂行しつつ、ノヴゴロド、ブスクフ、リヤザンの貴族たちを積極的に自らの宮廷に取りこんだ。
- (5) ステパン・イワノヴィチ・コルイチエフ（1537年以前に没）のこと。イワン3世のもとでノヴゴロド代官であったイワン・コルイチエフの息子。イワン雷帝の知恵連れの弟、ゲオルギイ・ワシリイエヴィチ公の後見人でもあった。
- (6) 1507年2月11日に生まれた。彼の守護聖人は、ティロンの聖テオドロスだったと思われる。
- (7) 『ワシリイ3世の病と死についての物語』参照。
- (8) ソロフキ修道院は、1420年代から30年代にかけてキリル・ベロゼルスキイ修道院の修道士であるゾシマとサヴァーチイによって白海のソロフキ島に創建された。15世紀終わりから白海の経済的政治的中心となり、モスクワ諸君主の庇護下にあった。『ソロフキのゾシマとサヴァーチイの聖者伝』参照。
- (9) フェオドルは1537年7月にモスクワを離れたが、それは、彼が青年時代からすでに修道生活に入る覚悟を決めていたからである。有力で裕福で権勢のある家系の出身者で、肉体的な欠陥がなかったにもかかわらず、

彼は30歳にいたっても結婚しなかった。しかし、彼がモスクワを去る直接のきっかけとなったのは、1537年4月から7月までに起こった事件である。コルイチエフ家はこの事件に巻き込まれ、君主から失寵したのである。

アンドレイ・スタリツキイ公の支持者たち、フェオドルの父の従兄弟であるガザリル・ウラジーミロヴィチ、フェオドルの叔父であるアンドレイ・イワノヴィチ、ワシリイ・イワノヴィチが処刑され、ゲオルギイ・ワシリエヴィチ公の右馬頭ウムノイ・コルイチエフが拷問の末投獄された。ウムノイ・コルイチエフはのちに解放されたが、キリル・ベロゼルスキイ修道院でセルギイの修道名のもとで剃髪を受けた。このことは、イワン雷帝がキリル・ベロゼルスキイ修道院に宛てた書簡のなかで言及されている。

- (10) 『フィリップ伝』のさまざまな写本のなかで、この村はキジャ、ヒジャ、ヒジとさまざまな名称で呼ばれている。
- (11) フェオドルはまず間違いなく、1538年に冬道を通ってソロフキ修道院にたどり着いた。
- (12) イワン雷帝の文書によれば、アレクシイ・ユレネフは1534年からソロフキ修道院の修道院長であった。
- (13) フェオドーシイは1542年からノヴゴロド大主教となったが、それまではフトウイニ修道院の修道院長であった。1550年12月にモスクワに召喚され、大主教位を失い、ヨシフ・ヴォロコラムスキイ修道院に流刑され、1563年に逝去した。
- (14) ノヴゴロドの職人たちが1552年に石の教会の建設に着工し、1557年の聖母就寝の祝日（8月15日）に聖別された。
- (15) 洗礼者ヨハネ斬首の付設礼拝堂は、イワン雷帝の天の守護者のために捧げられたものである。
- (16) フィリップの造った灌漑システムは、16世紀の水道技術の粋であった。修道院の壁のなかにある聖なる湖は、島の52の湖から水を集め、2つの運河によって水を海に落としていた。
- (17) 『ゾシマとサヴァーチイ伝』参照。
- (18) 石の教会は1558年に起工された。『ソロフキ年代記』によれば、建設事業はかなりの額のフィリップの私財を投じて行われた。フェオドル・スイルコフによって拝められた金の十字架、1000ルーブリ、2つの鐘、覆い布、領帶が、イワン雷帝によって修道院に寄進された。教会は、フィリップがモスクワに出立したのち、1566年8月6日に聖別された。
- (19) 福福音書に挙げられた、キリストの死後にキリスト教を伝導した、12使徒に捧げられた礼拝堂。
- (20) 聖書には、キリストの70人の弟子たちのことも言及されている。彼らは、つねにキリストにつき従ってイエスのすべての事績の目撃者になったわけではなかった。
- (21) イワン雷帝の息子で後継者であったイワン・イワノヴィチの天の守護者に捧げられた教会。
- (22) 『ソロフキ小年代記』の記述によれば、多くのイコン、器物、法衣、書物、燈明、ブスコフの職人によって鑄造された鐘が、フィリップの個人的財産であった。
- (23) ルジェツキイ修道院の典院であったが、1526年、大公ワシリイ3世の求めに応じてノヴゴロド大主教、1542年からはモスクワ府主教となった。修道院制度の確立、諸聖堂の建設、書物の翻訳に尽力した。マカリイの主導によってストグラフ（百章）会議が開催され、『大曆年代記（チェチイ・ミネイ）』が編纂された。
- (24) 世俗名は、アンドレイ・プロトボポフで、ツアーリ、イワンの信頼篤く、その懺悔聴聞司祭を務めた。1660年代のはじめにチュードフ修道院の修道士となり、1564年3月に府主教として按手礼を受けた。軍司令官オフチナ・オボレンスキイ（エレーナ・グリンスカヤの寵臣の息子）、ゴルバートウイ・シェイスキイの処刑を阻止する試みが失敗したあと、古くから府主教に認められていた「取りなし」の権利を奪われて府主教の座を追われ、1566年、チュードフ修道院に蟄居した。この人物に関する最後の記録は、1568年である。
- (25) 黒僧ピーメンは、キリル・ベロゼルスキイ修道院の修道士から、1552年11月にノヴゴロド大主教となった。オブリチニナを軽率に支持したことで自らの評価を落とした。アレクサンドロフにたびたび足を運び、オブリチニキを祝福した。1570年以降は失寵した。ウラジーミル・スタリツキイ、ジグムント・アウグストとの関係について罪を問われたのである。嘲弄をも被った。スカマロフ（異教楽師）として登録され、「妻」とし

て雌馬をあてがわれた。そのあと、ヴェネフスキイ神の御母昇天修道院に流され、そこで1572年11月に死んだ。

- (26) ゲルマン・ポレフは、1564年3月に按手礼を受けた。1556年4月にツァーリ、イワンの提案を受け入れ、府主教宮殿に到着した。最後の審判での神罰を被ると専制君主を脅し、府主教への叙聖の条件として、オブリチニナ廃止を要求した。スクラトフ=ベリスキイ、バスマノフ、グリヤズノイは、ゲルマンの府主教への推戴に反対したため、2日後にゲルマンは府主教館をあとにした。フィリップを支持した。1567年11月6日、モスクワで「疫病」のために逝去した。ほかの史料によれば、ゲルマンはイワン雷帝の命令によって首を刎ねられた。1595年、聖者の列に加えられた。
- (27) スーズダリ、タルサの主教、1567年に叙聖された。周知の通り、スーズダリはオブリチニナの領土だった。1569年9月に、主教位から追われた。
- (28) 1562年にシーモノフ修道院の典院から主教に叙聖された。オブリチニナ政策を積極的に支持した。1569年に主教位を追われた。
- (29) 1567年7月28日までスモレンスク、ブリヤンスク主教としてシメオンを名乗っていた。主教位は1555年3月に受けた。それまでは、キリル・ベロゼルスキイ修道院典院であった。
- (30) 1567年からトヴェーリ主教、それまでは、カザン救世主変容修道院の院長。1570年に主教位を離れ、自らの修道院に戻り、そこで1576年に死んだ。1595年に聖者に列せられた。
- (31) 聖堂における勤行規則の制定者。1565年からヴォログダならびにヴェリコペルミの主教。1577年に死んだ。1572年の宗教会議で、イワン4世が規則に反して4回目の婚姻に臨むのを許した。
- (32) フィリップの立場はかなり困難であった。1566年7月20日、フィリップは「オブリチニナとツァーリの家庭のことには介入しない」というイワン雷帝の条件を受け容れた。その代償として、ツァーリはオブリチニナを廃止するように署名をした300人のゼムシチナに属する人間を許した。コルイチエフ家は、ゼムシチナの長である大貴族、イワン・フョドロフと縁戚関係にあった。しかしながら、処刑はじきに復活した。聖者伝においては、フィリップは最初から、オブリチニナの首尾一貫した、妥協不可能な反対者であった。
- (33) クレムリンの受胎告知聖堂の長司祭、エフスターフィイは、アファナーシイのあとにツァーリの懺悔聴聞司祭となった。エフスターフィイはきわめて安易にツァーリの罪を許した。年代記の記事によると、彼は1570年のイワン雷帝のノヴゴロド遠征に同伴し、彼によって行われたすべての罪を赦して祝福した。
- (34) 聖セルギイ三位一体修道院とペレヤスラヴリ・ザレスキイの中間、セラ川のほとりに位置する。1514年に創建され、イワン雷帝の治世においてはオブリチニナ帝国の首都となった。
- (35) クレムリンのウスペンスキイ（聖母就寝）聖堂のこと。1479年にアリストテレ・フィオラヴァンティによって建てられたルーシの主聖堂。
- (36) ビザンツの文筆家アガベトスの「聖なる帝国の教訓」10章の断片。「航海する者たちについて。船乗りが間違いを犯したなら、航海する者たちに災いをもたらすであろう。だが、舵取りが誤りを犯したなら、船全体が破滅するだろう。」
- (37) 『詩篇』54篇5節（「異邦の者が私に逆らって立ち、暴虐な者が私の命を狙っています」）を踏まえた台詞である。
- (38) ウスペンスキイ聖堂でフィリップがイワン雷帝を祝福することを拒んでから、長老レオンチイ・ルシノフ、ニキータ・アーヴィチ、フョドル・ルシン、セミヨン・マヌイロフらは瀕死の状態になるまで殴られた。
- (39) グリゴーリイ・ルキヤノヴィチ・マリュータ・スクラトフ=ベリスキイ（1573年没）は、オブリチニナ軍の軍司令官。彼の名前は否定的なものとなった。
- (40) ワシリイ・グリゴリエヴィチ・グリヤズノイ=イリインは士族出身で、イワン雷帝にもっとも近いオブリチニナの一員。その運命については、『イワン雷帝の書簡』を参照。
- (41) フィリップは民衆の深い尊敬とゼムシチナの支持を獲得していただけに、フィリップの敵対者たちはフィリップを追い落とすのに際して嘘に頼るしかなかった。
- (42) ほとんどすべてのオブリチニナの指導者たちは、1570年代の初めに失寵した。チェルカスキイ、ヴァゼム

スキイ、ヤコヴレフは処刑され、バスマノフはツァーリの命令により自らの息子によって殺され、グリヤズノイはクレムリンの牢に繋がれた。

- (43) ここでは、「炉の場面 Пещное действие」という教会の儀式が念頭に置かれている。「炉の場面」は、旧約聖書『ダニエル書』3章22-51節、バビロニア王ネブカドネザルによって燃え盛る炉に投ぜられた3人の若者、ハナンヤ（シャドラク）、ミシャエル（メチャク）、アザルヤ（アベド・ネゴ）が生還するエピソードに依拠する、演劇的要素をともなった教会儀礼で、そこに登場する「カルデア人」はネブカドネザルの廷臣である。
- (44) プロホル、ニカノル、チモン、パルメンら、70人使徒たちの祝日のこと。7月28日。
- (45) ジエヴィチエ・ポーレ（処女の野）の新しい修道院は、1524年から25年にかけてワシリイ3世によってスモレンスク併合を記念して創建された。その主聖堂はスモレンスクの神の御母のイコンに捧げられたものであったが、その左側に付設された礼拝堂は70人使徒に捧げられていた。スモレンスクが陥落した7月28日は70人使徒の記念日であった。
- (46) 多くの場合、貴顕が被っていた東方由来の帽子。タフイヤを被ってはいけないという決定が、1551年2月のストグラフ会議で採択された（39条）。
- (47) アブラハムの妾で、その息子イスマエルを産んだ。ハガル、イスマエルはムスリムの祖先とされた。
- (48) おそらく、スパソ・アンドロニエフ修道院の典院（修道院長）であったフョードル・ヴァトカのこと。この修道院は、モスクワのゼムシチナ側にあった。『フィリップ伝』のある編纂本（フロノグラフ版）のなかでは、この人物はノヴィンスキイ修道院典院となっている。
- (49) ワシリイ・イワノヴィチ・チョムキン＝ロストフスキイ（1572年没）のこと。スタリツキイ公家につかえる大貴族であった。リヴォニア戦争のごく初期、リトニア人の捕虜となり、彼の兄弟たちと息子が「カザン地方」に流刑にされたときも、リトニアに留まった。1567年7月、捕虜の身から解放されて帰還したが、それからあとは、オブリチニナの積極的な活動家になった。府主教フィリップの一件は、ある意味で、忠誠心を試すためのテストであったが、彼はそれを耐え抜いた。しかしながら、1572年に処刑されている。
- (50) 府主教フィリップ追い落とし劇における、ソロフキ修道院長、パイーシイの役割は明らかではない。『フィリップ伝』のすべての編纂本で、彼はそのほか10人の長老たちとともにフィリップを中傷したとされている。しかしながら、1567年にパイーシイは修道院長の位を失ってモスクワに護送され、同時にソロフキ修道院の財産は封印されたことが知られている。この事実は、パイーシイも長老たちもフィリップの中傷を拒絶し、このために彼らも修道院も失寵したと仮定する有力な根拠を提示している。
- (51) 『詩篇』7篇16章。
- (52) この規則は、『ストグラフ（百章）』43-46章のなかでしばしば引き合いに出されている。
- (53) アレクサンドル（他史料ではアレクセイ）・ダニーロヴィチ・バスマノフ＝プレシチエフは、ワシリイ3世の寝殿官の息子で軍司令官。カザン近郊でのタタール人との戦闘で軍功を上げたほか、リヴォニア戦争のときはわずかな軍勢でナルヴァ占領を成し遂げた。1564年からは大貴族。アンドレイ・クルプスキイが主張するところでは、シレメチエフ家、レブニン家、カシン家にたいする制裁を先導した。1569年にイワン雷帝の命令により、自らの息子フョードルの手にかかるて殺された。
- (54) 1568年11月にフィリップが府主教位を追われてから、そのときまで聖三位一体セルギイ修道院の典院で、ツァーリの残虐行為を沈黙を守りながら目撃してきたキリルが府主教となった。キリルは1572年ノヴィンスキイ修道院に埋葬された。彼に替わって府主教位に即いたアントーニイは、ポーロツク主教であったが、1581年のはじめに逝去し、モスクワの町の外に葬られた。ノヴゴロド近郊のフトニ修道院の修道院長から、1581年に按手されて府主教位に即いたディオニーシイは、1586年にフトウイニに送還され、そこで逝去した。このようにフィリップの予言はすべて実現したと見なすことができる。